

## 6324 ハーモニック・ドライブ・システムズ

伊藤 光昌 (イトウ ミツマサ)

株式会社ハーモニック・ドライブ・システムズ会長

### 戦略商品の開発が進み業績は回復軌道に

#### ◆2013年3月期決算の概況

常務 長井 啓

2013年3月期連結業績については昨年11月に期初の業績予想を下方修正しており、前期実績に比べ減収減益となったが、おおむね修正後計画どおりに着地した。夏場以降に中国を中心とした新興国向けの設備投資需要が落ち込み、特に産業用ロボット関連が大幅に減少した。設備投資については、前期は長野県の穂高工場で生産能力を引き上げるための設備増強を行ったが、当期はこうした特殊要因はない。年間12億円前後が当社の平均的な設備投資額である。

主要グループ会社の業績では、北米の子会社ハーモニック・ドライブ・エルエルシーは減収減益であった。医療機器や工作機械は比較的堅調であったが、半導体関連が業界の世界的な低調により伸び悩んだ。また、航空・宇宙関連がアメリカの国家予算削減などにより軟調であった。精密遊星減速機を製造するハーモニック・エイディも減収減益となった。これは、半導体製造装置等に使用されるサーボモーター向けギアヘッドが、夏場以降に減速したことが要因である。また、同社の経営改革の一環として、より厳しいコスト対応を促すため、当社との取引価格の引き下げを実施した。ドイツのハーモニック・ドライブ・アーゲーは、欧州経済の全般的な低迷を受け、工作機械などが大幅に減少した。そのため減収減益となったが、同社の子会社からの配当収入により、当期純利益段階では増益を確保した。

単体の業績は、減収減益であった。半導体製造装置は、夏前頃から失速し始め低迷が続いた。フラットパネルディスプレイ製造装置は、業界全体の生産能力過剰により低迷が継続したが、テレビ向けが復調し、第4四半期からは回復感がある。産業用ロボットは、ここ数年当社業績の牽引役となっていた大手EMSでロボットの在庫調整に入ったため、受注が低迷した。営業利益については、減少要因として、減収による影響10億32百万円、販管費の増加34百万円があった。増加要因としては、毎年2~3%を目標に実施している仕入価格の改善、採算性がやや低い液晶関連向けが伸びなかったことによるプロダクトミックス上での利益率向上、ハーモニック・エイディとの価格改定など、これらによる限界利益率の変化で2億15百万円の増益効果となった。また、設備増強に起因する残業の減少や派遣社員の減少などによる製造固定費等の減少も2億30百万円あった。

連結の貸借対照表では、総資産が369億53百万円(前期末比14億10百万円増)となった。負債の部では、有利子負債が借入金の約定弁済により減少した。純資産は利益剰余金により増加し、自己資本比率は63.9%から67.5%に向上した。

#### ◆2014年3月期業績予想

2014年3月期は、足元の受注が改善傾向にあることを踏まえ、2期連続の減収減益から脱し増収増益の計画である。連結業績予想は、売上高が210億円(前期比15.8%増)、営業利益が47億円(同36.8%増)とした。上期は現在の受注環境が継続し、下期は上期比で約10%の増加を予想している。中国向けは季節要因として第3四

半期に低迷する傾向があるが、全体としては伸長する見通しである。収益マイナス要因として、今年韓国で合弁企業を設立しており、初年度は赤字を見込んでいることがあげられる。設備投資は、新製品の量産対応に必要な金型や治具類等を中心としており、生産設備は更新程度である。研究開発は当社の生命線であり、引き続き積極的に人員および資金を投入する。

主要グループ会社は、いずれも増収増益の計画である。ハーモニック・ドライブ・エルエルシーでは、航空・宇宙向けが減少するが、半導体製造装置や医療機器向けなどは堅調の見通しである。円安により仕入れコストが減少するが、増益のインパクトは限定的である。ハーモニック・エイディでは、経営改革を継続し、特に製造面の体質改善を行う。同社では、更なる内製化を進め採算性を向上させるプロジェクトを実施しており、これを推進していく。ハーモニック・ドライブ・アーゲーでは、工作機械や産業用ロボット向けが回復傾向にある。同社とは円建てで取引を行っているため、一定の為替効果が見込める。

単体の業績予想は、売上高が188億円(前期比16.3%増)、営業利益が41億5000万円(同40.4%増)である。半導体製造装置は、台湾の大手メーカーなどが微細化投資に向かっており、今後は伸長すると見込んでいる。フラットパネルディスプレイ製造装置は、スマートフォンやタブレット端末需要のほか、テレビにおいても中国の地デジ化や4Kテレビなど高品質テレビへシフトするための設備投資が活発化している。産業用ロボットは、大手EMS向けが停滞したが、在庫調整が終了すれば復活すると見込んでいる。小型ロボットが回復基調にあり、自動車関連の溶接ロボットも増加している。ギアヘッドは、半導体製造装置やフラットパネルディスプレイ製造装置の低迷を受け低水準となっていたが、これらの回復に牽引され増加傾向にある。営業利益の増益要因は増収効果で14億6000万円、減少要因は限界利益率の変化で2000万円、売上増加に伴う製造固定費等の増加で8000万円、販管費の増加で1億6500万円である。

## ◆アジア市場での拡販を目指す

会長 伊藤光昌

2013年3月期は、中期経営計画初年度であったが、収益計画は未達成に終わった。2014年3月期も、当初計画した収益には及ばない見込みである。初年度計画未達成の要因として、まず外部環境が想定よりも非常に厳しかったことがあげられる。中国を中心とする新興国経済が伸び悩んだことに加え、欧州市場における金融不安の余波が経済成長の足かせとなった。国内では、現在は景況感が明るくなっているが、実体経済までは及んでいない。内部要因として、過去数年間は新興国・新興市場の急激な変化に翻弄され、新製品開発におけるスピード感を欠いた。同時に、新市場の開拓も遅れたことが挙げられる。ただ、計画の定量的な目標には達していないが、計画に定めた基本的な方針に基づく新製品開発等は進んでおり、一定の成果は上がっている。それを元に2015年3月期の目標達成に向け全力を尽くす。

中期的な成長の鍵は、まず品質と安全を最優先した経営を第一と認識し、コア技術の強化および製品バリエーションの拡充を図り、アジア地域への拡販を強化することである。中期経営計画達成に向けた重点施策は、精密遊星減速機市場の新たな拡大、新製品による市場深耕、アジア市場への拡販強化である。

当社グループ製品であるハーモニックドライブ®の一般名称は波動歯車装置である。これは、金属を弾性変形させる機構であるが故に、現在の技術では低減速比を得られない。そこで、より低い減速比のニーズを満たすため、異なる原理を採用した遊星減速機も市場投入してきた。いずれも高精度を求められる製品であるが、遊星減速機ではゼロバックラッシュが実現できないため、対象となる市場には違いがある。当社グループの製品ポジションは、高精度・高価格帯に属する。産業用ロボットや半導体製造装置ほどの精度は必要ないが、一定以上の精度が求められる搬送装置や加工装置などの市場があり、遊星減速機は主にこの市場を対象とする。要求精度の低い低価格帯の市場は、当社グループ製品の特性上対象としない。搬送装置や加工装置などの市場にはメーカーが多数存在し、減速機にも厳しい価格競争が強いられるが、アジアではこの分野が主戦場である。当社はこの市場を

狙い、アジアで一定のシェアを確保するため、アジア市場向けの精密遊星減速機を投入していく。同時に、高性能・高トルクタイプの新製品も開発しており、これは産業用ロボットや半導体製造装置などの主に日・米・欧の市場をターゲットとする。

アジア向け製品の製造拠点として、今年 2 月韓国に、韓国の代理店との合弁会社である三益 ADM(株)を設立した。当社の出資比率は 51.0%で、連結対象子会社となる。2015 年に約 15 億円の売上高を目標とする。

コア技術の強化と製品バリエーションの拡充に関しては、減速機の製品開発には、より大きな力を、より小さな容積で、より軽く、より精度良くという着眼点がある。これにより基本性能の向上を図り、減速機の性能を最大限に引き上げていく。同時に、装置に組み込みやすくするため、軸受けやハウジングなど周辺部品の開発も行う。ハーモニックドライブ®の新製品では、約 30%の軽量化に成功した。減速機本体の優位性の向上と周辺部品の技術・技能を高度に組み合わせ、商品ラインアップの拡充を推進している。また、基礎理論研究、材料開発、生産技術開発、耐久実験などにより、着実に技術と技能の蓄積を進めていく。

アジア地域では、韓国以外にも、中国、台湾、シンガポールのパートナー企業の協力のもと拡販強化に努める。中国に新設した販売子会社は、技術サポート力の高さが評価され、中国に展開する欧州系ロボットメーカーや地元ロボットメーカーからの受注を獲得している。

今後も、技術と技能の研究を積み重ね、精密制御分野における各要素を深耕し、トータル・モーション・コントロールの高度化を追求していく。

なお、5 月 14 日の取締役会において、現常務長井啓が次期社長に就任することが内定した。6 月 21 日開催の株主総会をもって正式に就任する。

(平成 25 年 5 月 22 日・東京)